

滑稽俳句論壇 172

横井也有（二）

伊藤浩睦

俳諧も面白いのですが、也有は俳文の名手として知られています。「鶉衣」という俳文集があります。題名を「あやしくはへもなききれぎれを、あつめつづりたるを、うずら衣とはいうなり」と説明しています。出典は荀子です。孔子の弟子だった子夏が貧しくて継ぎ接ぎの衣類を着ていたのを、毛色が入り混じっている鶉のようだと評されたところから、色目も定まらない幣衣を鶉衣と呼ぶようになりました。そこから、横井也有は粗末な文章の寄せ集めと謙遜して、俳文集の題名としたのです。代表作の「奈良団賛（ならうちわのさん）」を転載してみます。

青によしならの帝の御時、いかなる叡慮にあづかりてか、此地の名産とはなれりけむ。

世はたゞ其道の芸くはしからば、多能はなくてもあらまし。かれよ、かしこくも風を生ずるの外は、たえて無能にして、一曲一かなでの間にもあはざれば、腰にたゞまれ公界にへつらふねぢけ心もなし。只木の端と思ひすてたる雲水の生涯ならむ。

さるは桐の箱の家をも求めず、ひさごが本の夕すゞみ、昼寝の枕に宿直して、人の心に秋風たてば、又来る夏を頼むとも見えず。物置の片隅に紙屑籠と相住して、鼠の足にけがさるれども、地紙をまくられて野ざらしとなる扇にはまさりなむ。

我汝に心をゆるす。汝我に馴れて、はだか身の寝姿を、穴かしこ、人にかたる事なかれ。

袴着る日はやすまる団かな

奈良団扇という詰まらない日用品を、扇子と比較して大仰に褒めています。ここでは「団扇」と書かず「団」と書いて「うちわ」と読ませています。平易な文章なので読めばその意味は分かりますが、少し説明しましょう。

団扇は風を送る以外には無能であり、舞の一手に使われることもなければ、腰に差されて人前に出ることもなく、世にへつらうこともない雲水のような生涯である。桐の箱を家と求めることはなく、夕顔の下で夕涼みや昼寝に使われ、秋になれば次の夏まで保管されることもなく、物置で鼠に踏まれるが、紙を捲られ野ざらしになる扇子よりは良い。私は団扇に心を許すが、団扇よおまえは馴れて、私の裸の姿を人に語るなよ。

軽妙洒脱な文章ですが、内容はこれほど無意味なものもなく、蘊蓄や教養とは無縁のものになっています。松尾芭蕉の俳文のような、歴史を顧みて自然を賞翫して人の生き方を模索しようとするところは一切なく、無意味、無用の極致ともいべき無駄口に終始しています。

芭蕉の俳文には読み手を啓蒙しようとするところがあるので、教科書にも古文の教材として載せ易いのですが、也有の俳文は子どもの手には負えないところがあります。無意味な無用の無駄口を滑稽と捉えて楽しむ精神的な余裕がなければ、「鶉衣」に載せられている俳文は理解出来ません。

俳文の末尾の句は、袴を着る、つまり仕事に出る日は扇子を用いるから団扇は休みになるという意味です。これは、仕事で袴を着ない農民や町人と、自分は違うことを示唆しています。